

敦煌莫高窟第二八五窟の開鑿背景について

田林 啓（神戸大学、日本学術振興会）

敦煌莫高窟第二八五窟（以下本窟）は、西魏初の大統 4、5 年（538、539）という紀年銘を持ち、壁画の特異な内容及び技法水準の高さによって北朝窟を代表する窟の一つとなっている。また、莫高窟において所謂中原的要素を前面に押し出した最初期のものとしても注目される。これまでの研究では、壁画の様式や内容、窟主について盛んに論じられてきたが、窟開鑿の原因については、ほとんど触れられてこなかった。本発表では諸学の研究成果に基づき、本窟の開鑿背景について考察する。

本窟の壁画は全壁に保存状態良く残るが、内容に統一をみない。また北・東壁に残される尊像名も過去仏及び無量寿仏であり、窟全体の世界観について研究者間の共通の意見は未だに存在しない。しかし、天井、西壁には禅定僧像が壁画或いは塑造で表わされ、南壁の内容も禅定に関わり、かつ南北壁には房室を設けるため、禅定と深い関係にあることが分かる。その上で、窟内の中原的要素、そして孝昌元年（525）以前に中原から敦煌地域に刺史として赴任し本窟開鑿に関わったとされる元栄との関わりから北魏後半期の中原における仏教の在り方をみてみると、そこでは仏教を通して天上世界に往生するという程度の信仰が行なわれていた。その信仰は弥勒の兜卒天への上生と結びつき、また 520 年頃からは無量寿仏をも包含していった。禅定についても、関連経典及び『高僧伝』の記述から、兜卒天上生との関連が指摘される。弥勒は周知のように未来仏として過去仏に連なるものである。こうしたことにより、本窟は 520 年頃からの北魏の中原仏教の在り方を反映しており、その根本思想は天上世界への往生という程度のものであったと考えられる。

北魏の中原仏教は、また政治と深く関わっており、内政統治の手段として使用されたとされる。元栄が史料に登場する頃から六鎮の乱が勃発し、それに伴って各地でも反乱が起き、その対策として行台が次々と設置（派遣）された。全国的に反乱が治まり出したのは 530 年頃であるが、現存する史料から元栄が 530 年から 533 年の 4 年間に集中して写経事業を行っていることが分かる。即ち、元栄は行台と同様の任務を負わされて敦煌に刺史として赴任し、反乱の治まる頃より敦煌内政統治のために仏教を利用し、写経事業を始めたと推測される。それから間もなくして、敦煌は西魏支配下に入るが、『周書』の大統 5 年（535）の記事には柔然の西魏への侵攻が相次いだ後、西魏と柔然が和親を結ぶとある。地理的關係等から敦煌へも柔然の侵攻の危険があったであろう。本窟は紀年銘から 538 年以前に開鑿されたことが分かるが、柔然の侵攻が止んだ結果、写経事業に続く内政統治政策の一環として記念碑的なものとして開かれることになったと推測される。そのため、そこには国家主導の北魏中原仏教の在り方が大いに反映されたと考えられる。また南壁の画面大半を占める「五百強盜帰仏因縁図」と近似する内容は中原仏教教団で参考とされていた『十誦律』にも見られるのである。

以上から、第 285 窟の開鑿は敦煌地域統治を目的としたものであったと結論付けられる。